

持続可能な環境を実現するまちづくり

～第3回／ふつうに働けばふつうに食べられる社会～

菱川 貞義 (NPO 法人いのちの里京都村理事)
浄土真宗本願寺派総合研究所委託研究員

宗門総合振興計画では、現在、その基本方針に基づきさまざまな事業を推進しております。本シリーズ『持続可能な環境を実現するまちづくり』は全三回を予定しておりましたが、これを全四回に変更し、環境汚染や集落の存続の問題への対応策や寺院の可能性について報告いたします。これは、基本方針「仏教の精神に基づく社会への貢献」のひとつである「仏教界の各団体と連携を深め、社会的課題への対応について知見を集約し、社会へ発信すると共に、公教育における宗教知識教育の推進のはたらきかけや孤独死・看取り・自死・いじめ等の社会不安に積極的に関わる」事業のひとつです。

前回までは「環境問題の解決を可能とする新しい共同体と、その共同体を解体し社会を混乱させているお金」について論じましたが、今回は新しい共同体による持続可能なまちづくりについて考えてみます。

■「まちづくり」とは

まちづくりは、何か特別なことを行う

ものではありません。短期的な成功を求めたものでもありません。ずっと戦い続けなければならないものでもありません。まちづくりは決してむずかしいものではないのです。

しかし、特別なことではないのに、私を知る限り、まちづくりがうまく進んでいる事例はわずかで、そのほとんどが失敗に終わっていたり、新たに深刻な課題を抱えたりしています。なぜ、多くのま

ちづくりはうまくいかないのでしょうか。

それは、何か売れる特産品をつくるか、人が集まる施設や観光事業をつくるか、まちづくりの目的がお金になっているからです。カネやモノはまちづくりの手段のひとつであって目的ではありません。お金儲けが目的になるとゴールは見えません。「お金が入るようになれば仕事も増え人も増える」といいますが、自治活動や環境保全活動や助け合いなど地域社会に必要な機能の多くはお金を介さない活動です。お金儲けだけを考えると、どうしてもお金を介さない活動は荷物になったり敵対関係になったりします。まわりより自分が大切になってしまいがちです。関係者へのヒアリングで得た事例を少し紹介します。

たとえばあるまちづくりでは、この山にでもある無価値な物を都市に向けて価値化・商品化することで、短期間で地域の一大産業に成長し、若い移住者が集

まるようになりました。しかし、地域の利益ではなく個人の利益に関心が集まり、住民どうしが敵対関係となってしまう、より高い利益を求めてやまない個人と個人がのどかな農村風景のなかで火花を散らし、ぶつかり合っています。肝心のビジネスとしての成功も最初だけで、いまはビジネスとしては成立していないように、活気が保たれているのはそのビジネスの評判のキーワードに群がるさまざまな事業者と補助金事業だけのようです。

また、ある観光スポットを中心としたまちづくりも、大規模観光施設を造って成功した事例として有名で、全国からの視察も絶えませんが、30年以上経ったいまも多額の補助金が無くても存続できない状態です。観光客で賑わうまちづくりを望まない住民も少なくありません。

このようなまちづくりの問題点は大きく二つあります。ひとつは、アイデアを持ち込んだ外部の者と一部の住民

だけで事業化し、多くの地域住民が蚊帳の外のまま短期間に取り組みを進めたため、地域住民の主体的なかわりに乏しかった。もうひとつは、ビジネスでまちづくりを牽引する事業が企業化し、利益獲得が最大の目的となり、自治や福祉、環境保全などの課題が置き去りにされたことです。祭りや清掃活動等の行事、防災や防犯等への取り組み、見守りや助け合い、森林管理や水質保全等、これらの課題はお金だけで解決することではなく、地域住民の努力と長期にわたる地道な取り組みが不可欠です。持続可能な集落の姿は、地域住民が主体となって長期にわたるまちづくりを計画し実行しないと見えてこないのです。

そもそもビジネスという世界で勝ち続けるのは非常に厳しく困難です。どこかで利益の出る商品が生まれれば、類似の商品があちこちで誕生し、血みどろの競争の大海に投げ出されます。価格ダウンがおこり、人件費をはじめ下請けのコス

トカットが容赦無く行われ、不要な差別化商品開発にエネルギーを費やし、それが利益を生めば、また「似せて・競って・下げて・切って」の繰り返しです。相当の情報力、人材力、資金力が必要ですし、他に先んじるための組織力や意思決定速度も求められます。大企業であろうと、いわゆる勝ち組に残るのはかんたんではありません。もし勝ち続けることができずる集落があるとしてもそれはほんの一握りでしょう。それではだめなのです。全国には13万以上もの集落があります。そのそれぞれが及第点をとれるやり方であれば、実現可能なまちづくりの手法とはいえないでしょう。

新しい魅力的なビジネスを求めて、普段の食事に使う野菜の栽培をやめて高級レストランで使われる洋野菜を育てる農家や集落が増えてきました。例えば国外でも、商社の提案で自家消費用の野菜や果物づくりをやめてコーヒールーム園をはじめたところがたくさんあります。です

が、このようなビジネスも多くは負のスパイラルに陥ります。そのきっかけは、グローバルな流通に対応できる品質を確保するために借金をして設備投資をし、価格をおさえるために農地を拡大し大型機械を導入し大量生産をはじめることです。自家消費用の農地も使うようになり、農家もお金で農作物を買うようになります。こうしてお金を中心とした生活の仲間に入ってしまうのです。

また、儲かっているうちはいいのですが、儲かるビジネスにはすぐに競争相手が現れます。これに対抗し、生産効率を上げるために、さらに借金をして最新設備を入れ農地を広げ生産量を増やしますが、競争相手もまた同じことをします。

これは商社と消費者にとっては好都合です。商社は商品を大量に扱えるので利益が増えます。消費者は同じ商品を安く買うことができます。やすらぎだけがなくなっていく生活に、農家は元の生活に戻りたいと思うようになるかもしれません

が、こうした負のスパイラルから抜け出すのは容易ではありません。拡大を止めれば競争力をなくし商社は取引してくれません。廃業できればいいのですが、莫大な借金だけが手元に残ってしまうために、それかかないません。このような金儲けのビジネスで、最後まで生き残れる者はほんの一握りなのです。

こうした現代の借金をベースにしたビジネスモデルは、「成長するしかない」という強迫観念にとらわれていきます。一度このビジネスモデルのルールに乗ると途中で降りることが許されません。それでも何とか降りてみると、たいして何も残っていないことに気づかされるでしょう。

■ 成功するまちづくり

ではどうしたらまちづくりは成功するのでしょうか。「まちづくりのゴール」とはいつたいどこにあるのでしょうか。「ま

ちづくりのゴール」をかんとんというところから、「自治活動も環境保全活動も福祉活動も経済活動も持続可能な地域社会」でしよう。私は「まちづくり」を「千年つづくまちづくり」と言い換えることでわかりやすくなるのでは、と考えています。

私は、まちづくりの際には「千年」というキーワードを出すことを大切にしています。「住んでいる地域が千年後にどうなっていてほしいか」を想像するとき、お金や自分の子孫というような個人の利益調整が意味をなさなくなるからです。ただ共同体の行く末のこと、地域の自然環境との共生が関心事になります。千年後を想像するまちづくりワークショップでは、ほとんどの人が、自分のことではなく共同体のことを考えはじめると、なぜか幸せな気持ちになる体験をします。自分がどのようにあるのがいいのかを頭ではなく体が先にわかっているのかもしれない。そうしてワークショップを重ねていくと、それぞれの地域ごとの、う

まくやっていくためのゴールが見えてきます。まちづくりのゴールは、ゴールすることそのもの（千年つづくまちづくりが達成されること）ではなく、ゴールのビジョンと、そこへ向かう姿勢を地域のみんなで共有し、持続可能な地域の姿をつくることにあります。

私は、「千年つづくまち」を、それぞれの地域がそれぞれの地域らしく、そこにいる人を含めた自然環境を持続可能に保つために、さまざまないのちの「ひたすらな働き」があれば、ふつうに幸せに暮らしていくことができる社会、つまり「地域共同体のなかでふつうに働けばふつうに食べられる経済システムを備えた社会」であると定義しています。

「ひたすらな働き」とは、それぞれのいのちが、自分のできることをもって、惜しむことなく動くことです。とくに意識するものでもなく、健全な共同体のなかについて体を動かしたくなることにまかせて動くことであり、さまざまな生き物

たちが日々の暮らしの中において自然に行っていることです。地域や共同体においては、自分ができる「ひたすらな働き」が土台にあってはじめて、いろいろな生き方をすることができます。いのちをもつ者にとつてこの「ひたすらな働き」は必須であり、持続可能性を保証してくれるものです。

「働く」の語源は「傍が楽になるように動くこと」とあるという説があります。その意味では、地球上のあらゆる生き物は、ひたすらに働いて（動いて）いるといえるでしょう。たとえば、ミツバチやチョウチヨなどの虫は花から花へ花粉を運び、植物たちが実をつけるのを助けます。虫たちはこのとき意識して生態系を支えるために働いているわけではありません。ただ、生きるために、生態系の中で自身ができることをひたすらに続けているだけでしよう。他の生物も同じ事です。さまざまないのちによるさまざまな「ひたすらな働き」の複雑な組み合わせ

が、生態系という自然界における持続可能な共同体です。

もし、ミツバチやチョウチョなどの虫が、ある1年のあいだ働くことをやめ、花にやって来なくなったら、それだけで、ほとんどの植物が実をつけなくなり、草食動物や肉食動物に影響が及び、さらに他の生きものにも伝播し、生態系全体が危機に瀕してしまうでしょう。同じように、私たち人間も何らかの理由をつけて働かないで日々を過ごすようなことがあれば、持続可能性を脅かす存在になってしまうかもしれません。少なくとも生態系にとって必要な生きものになってしまうことは避けられないでしょう。「働き」とは、「その人のできること」であり、具体的には米をつくる働きであったり、他者に寄り添う働きであったりさまざまです。それは先ほどたとえに挙げたミツバチやチョウチョも同じです。事故か何かで飛べなくなってしまうとしても、いのち終えるその時まで、

悔やむことなく、止まることなく、そのときできる働きをしています。地球上の多様ないのちがひたすらに、それぞれのできることを自然にまかせて行うことが、「ふつうに働く」ということだと思っています。

その共同体に住む人が、千年という自身の利害を超えたスケールのゴールを共有し、それに向かって自分でできる働きを、自然に任せてひたすらに、ふつうに働くことで生きていけるしくみを備えた持続可能な共同体の構築こそが、成功するまちづくりなのだといえるでしょう。

■ まちづくりⅡ

自己中心性に向き合う

お金によって共同体が年々弱まっています。共同体を弱体化させているのはお金ですが、お金は人間がつくったものであり、共同体を弱体化させる力の元は人間にあるはずです。しかし、人間の

のどこにあるのか見ることができません。巧妙に、複雑に、混沌とした、共同体を弱める「何か」の力が世界に蔓延しているのが近代社会です。お金の機能を信じられないものになっているのも同じ力です。これは今も増殖中で、幸せからはど遠い社会の姿を理想の社会だと信じさせています。

お金をつくったのは人間ですし、お金を商品化して地域を持続不可能にしたのも、地球環境問題を引き起こしているのも人間です。もちろん、人間も意図して地域や地球を壊しているではありません。しかし、地域や地球が壊れていく事実と直面したまま、解決には消極的です。問題が解決しない原因を政治や行政や企業に求めたりもしますが、その本当の原因はそれぞれの人間の中にあります。

問題を解決したいと思っっている自分が原因をつくっていて、自分が原因を取り除くことができるのに、「何か」が邪魔

をして自分で取り除くことができないでいます。私たちは問題の原因が自分の中にあるとは思いません、外に「敵」を作り出しては、それに戦いを挑むことを繰り返すばかりで、いつまでたっても原因そのものに向き合うことはありません。

おそらく、すべての原因であるこの「何か」とは、すべての人間が生まれつき備えている「自己中心性」がかかわってきます。私たちはこの自己中心性ゆえに、共同体を弱体化させるような選択をとり、自分は悪くないと外に「敵」を作り出し続け、問題を先延ばしにし続けています。

まちづくりには、こうした私たちのありさまを認識できるものにしたうえで、その影響力に対抗するための力が要りません。弱体化した共同体をほどほどの強さにするための助けとなる力です。人間を外から無理やり抑え込む強制力をもつ、制度のような力ではなく、私たちが自分の中の自己中心性に向き合っていけるよ

うになるための力です。経済の成長は不要ですが、私たち自身の心の成長が必要となります。私たち一人ひとりが変わって、自分の自己中心性に向き合い、強制力が強すぎないほどほどの共同体が形成されれば、ゆつくりと半自動的に「小さな幸せに満たされたまち」づくりがすすんでいきます。そのために必要なのがお寺の、ひいては仏教の力なのかもしれませぬ。

菱川貞義（ひしかわ・さだよし）

講演社こども美術学園講師、印刷会社、デザインプロダクションを経て、1989年に広告会社（株）大広に入社。デザイン、コピー、プロモーション、プランニングの仕事をするが、地球環境プロジェクトチームとして滋賀県・NTT共同プロジェクトに参画し、「市民参加型情報ネットワーク」の社会実験「びわこ市民研究所」を運営。

2006年から環境に負荷をかける自然農を実践。

2008年には「25研究所」を社内ベンチャー組織として立ち上げ所長に就任。

2012年に農村再生をミッションとするNPO法人いのちの里京都村を設立。

2014年からは浄土真宗本願寺派総合研究所の他力本願netのプロジェクトに参加、委託研究員として「1000年続く地域づくり」をテーマに、まちづくり、セミナー、ワークショップ等を行う。